

# 第一章 光る源氏の物語 薫物合せ

## [第一段 六条院の薫物合せの準備]

\*御裳着のこと(明石姫の成人のお披露目の儀のことを)、思しいそぐ御心おきて(お考えになって準備を為さる源氏殿の御腹積もりは)、世の常ならず(今までに無い立派なものをという事でした)。 \*「おんもぎ」は注に<明石姫君の裳着。明石姫君、十一歳。裳着の儀式は女性の成人式。>とある。

\*春宮も同じ如月に(皇太子も同じ二月に)、\*御かうぶりのことあるべければ(御元服の儀が予定されているので)、やがて御参りもうち続くべきにや(その流れで姫君の御入内の儀も打ち続く予定のようです)。 \*「とうぐう」は注に<朱雀院の皇子、十三歳。>とある。特に年末年始の記事もなく、年は明けているようなので、今からは十年前になる「濤標」巻第一章第三段の記事に、朱雀院が今上帝に譲位したのと同時に、抱き合わせのように朱雀院と時の承香殿女御との間に儲けたこの第一皇子を立坊した、ということは述べられていたが、この春宮の誕生や年齢に付いての記事は記憶がない。が、何処かにあるのだろう。注に従う。 \*「おんかうぶり」は<元服して初めて冠を着けること。うひかうぶり。>と古語辞典にある。注には<元服は男性の成人式。明石姫君と東宮が共に成人式を挙げ結婚の準備に入る。>とある。

\*正月の晦日なれば(正月の末日なので)、公私のどやかなるころほひに(新年祝賀も収まって、公私共に寛いだ頃合いに)、薫物\*合はせたまふ(源氏殿は香料の試し嗅ぎを為さいます)。 \*「正月の晦日」は「しゃうぐわちのつごもり」と読みがある。注には<時節は春正月の下旬。正月の年中行事なども終わってのんびりとしたころ。>とある。 \*「合はず」は、或る物に別の物を近付けて見比べる。何か基準値が有れば、其れに照らし合わせる。香りであれば、嗅ぎ比べる。

\*大弐の奉れる香ども御覧ずるに(大宰の大弐が贈ってきた香料類を試し利きなさに)、「なほ(やはり新しいものは)、いにしへのには劣りてやあらむ(昔のものより劣るかも知れない)」と思して(と御思いになって)、\*二条院の御倉開けさせたまひて(近く予定されている裳着式場の模様付けの見直しを思い付きなさり、二条院の倉庫を調べさせ為さって)、唐の物ども取り渡させたまひて(在庫の舶来品の数々を取り寄せ為さり)、御覧じ比ぶるに(一応決めてあった飾付けの材料と見比べなさは)、 \*「大弐(だいに)」は大宰府の次官だが、長官たる「帥(そち)」が王家の名誉職だったので、実質では現地の長官であったらしい。大宰府は外国との折衝窓口業務も司ったので唐や高麗の珍しい舶来品に逸早く接したということがあったのだろう。注には<大宰大弐は系図不詳の人。源氏に献上した香。中国舶来の品である。>とある。 \*「にでうのゐんのみくら」を調べさせたのは、単に古い香木を探させたのではないようだ。上の「と思して」は、殿は香の試し利きをしたことで<今の物としては最上の是の香料が必ずしも昔の物より優れているわけではないとしたら、その他の織物や調度品などの舶来品も今現在用意した物よりも優れた古い品々が二条院の倉庫に眠っているかも知れない>と御思いになり、「世の常ならず」と「思しいそぐ御心おきて」をしたる「御裳着のこと」を見直そうと思ひ立ち為さった、ということのようだ。此処の箇所だけでは、とてもそうは読めないが、下に織物の話題が続くので、むしろそう読まないという意味が通らない。という先読みからの後付けだが、ちょっとこの書き方は舌足らずに過ぎる、かと作者を責めたい。

「錦(金糸銀糸使いの合わせ糸で浮かし文様を織る厚手織物)、綾(単糸の浮かし織で地文様を作る薄手織物)なども、なほ\*古きものこそなつかしうこまやかにはありけれ(やはり古いものの方が奇をてらわず丁寧な仕事をしているようだ)」 \*「古きものこそなつかしう」は昔から有る言い方なんだと改めて思われるが、確かに歳を取って自分の人生を振り返ると共に若かった当時の世相や物事を懐かしむという事は、人間に普遍的にあることかも知れない。が、それとは別に、事物自体にも草創期の生々しさがあるという面も、やはり有りそうだ。一般に、物事の客観的評価が定まっていない時は、未だ定型が無い訳で、作家は自分の思いを具現化するために一途に丹念にその事物の製作に取り組む。その真剣さと試行錯誤の苦労の跡は必ず作品に残るもので、その新しい輝きと共に、その生々しさも、その事物が現存する限りは後世に名残として伝わる。しかし、一旦型が出来上がれば、人々はその物を消費して豊かに暮らすので、生産者は生産効率を競う。そして更なる工夫を競う。斯くして社会は豊かになり、原点を見失う。温故知新は名言だ。

とて、\*近き御しつらひの(近く行なわれる裳着の室内装飾の)、物の覆ひ(食卓布)、敷物(床敷布)、茵(しとね、座布団)などの端どもに(などの縁取り類用の飾り布に)、\*故院の御世の初めつ方(桐壺院の御世の初めの頃に)、高麗人のたてまつれりける綾(高麗人の献上した綾織物や)、\*緋金錦(赤地の錦)どもなど(類などを)、今の世のものに似ず(今では珍しいものと)、なほさまざま御覧じあてつつ(更に色々と見選びなさりながら)\*せさせたまひて(仕立せさせ為さって)、 \*「近き御しつらひ」は一見しただけでは、何のことか分からなかったが、与謝野訳文で大意を得て、上の文を何度か読み直して、これが<近く行なわれる裳着のための室礼>のことだと分かった。 \*「故院の御世の初めつ方」は、実際にその品物がその当時の献上品ではあったのかも知れないが、殿の幼少期、いやむしろ出生前の世情や母御の桐壺更衣への思い、もしくは臣籍降下したとは言え王家血筋であることの自負など、どこかキナ臭さのある殿の意向を感じさせる言い方だ。太政大臣に納まっている今さらにして、故院を持ち出すのは作為的だ。 \*「緋金錦」は「ひごんき」と読みがあり<金糸を織り入れた緋色の錦。秘錦(ひごん)。>と大辞泉にある。 \*「せさせたまひて」の「(せ)さす」は「端どもに」を受けた<仕立てさせる>という意味の使役の助動詞で、二重敬語ではない。

\*このたびの綾(この度の式場用に予め用意してあった綾や)、羅(うすもの、先が透けて見える薄い綾織物)などは、人びとに賜はず(お側女房たちに下げ渡しなさいます)。 \*「このたびの」は注に<大式が献上した品物をいう。>とある。が、中にはそういう品もあつたかもしれないが、此处で言う「このたび」は<この度の裳着のために既に用意してあった品々>に違いない。この文は、「大式の奉れる香ども御覧ずるに」から句点の間無く続く語り口なので、その筋で一貫した意味を読もうとすれば<大式の奉れる品>の述語に収めたくなりがちだ。むしろ其れは読者の好意的な読み方で、是は作者の書き方が悪い、ないしは脱稿、ないしは写し損じ、などによる欠陥に思えるが、それでも「近き御しつらひ」を<裳着の準備>と読み取った与謝野晶子先人にして、この「このたび」を<大式の品>と苦しませる罪深さだ。

香どもは(かうどもは、香料類は)、昔今の(昔のと今のとを)、\*取り並べさせたまひて(それぞれ小分けして人数分に取り分けさせて机に並べ揃えさせ為さって、各部屋女房を呼び集め同じ条件で薫物合わせを競い合うことを認識させて)、御方々に配りたてまつらせたまふ(御夫人方に御配達申しさせなさいます)。 \*「取り並べさす」は<一定の物を取り分けて俎上に並び揃える>か<色々な物を寄せ集めて俎上に並び広げる>かだが、下に「配り奉らす」とあるのだから前者だろうし、作者がこの語用で示そうとし、多分当時の御用女房なら示せたであろう、と私が汲み取った場面描写を補語した。

「二種づつ(ふたくさづつ、みなさま二種類づつ)\*合はせさせたまへ(調合を試みて合わせ香料を作ってください)」と、聞こえさせたまへり(申し渡しさせなさいました)。 \*この「合はす」はく嗅ぎ比べる>ではなく<調合する>。「薫物合はせ(たきものあはせ。各自練り香を持ち寄り、その香で優劣を争う遊戯。[古語辞典])」を前提とした言い方、のようだ。

贈り物(裳着式での引き出物や)、上達部の禄など(参列する高官たちへ贈る衣服など)、世になきさまに(またとなく最上のものを)、\*内にも外にも(六条院でも二条東院などでも)、ことしげくいとなみたまふに添へて(忙しく縫い仕事を営みなさるのに加えて)、方々に選りとのへて(それぞれのお部屋では香料を選び整えて)、\*鉄臼の音耳かしかましきころなり(挽き合わせる鉄臼の音が喧しい今日此の頃でした)。 \*「内にも外にも」は注に<「内」は六条院、「外」は二条院、二条東院などをさす。>とある。二条院を「外」と認識をするのかと意外な注だ。実際には、業者に外注する事柄も京都洛中洛外図の賑わいを思えば当時でもありそうだが、さすがにそれらを殊更に「外」とは言わないのだろう。しかし、下に朝顔齋院から練り香が届けられ、其れが殿の依頼によるものだという記事が有るので、私としては不本意な先読みながら、この「外」は外部関係者・縁者を示しているらしい。ただ、いずれにせよこの書き方は、この裳着および姫の入内が源氏大臣家を挙げての最重要事項であることを示す記事ではありそうだし、「鉄臼の音耳かしかましき」に他家の情景描写まで含まれているとも読み難いので(二条東院)などに従いたい。 \*「鉄臼」は「かなうす」との読みで<鉄製の小型の臼。香料をつくの用に用いる。>と大辞泉にある。

\*大臣は(殿は)、寝殿に\*離れおはしまして(正殿の母屋に夫人を遠ざけて独り籠もりなさって)、\*承和の御いましめの二つの方を(仁明天皇が口外無用と戒めなされた香料の秘伝の調合法の二種類を)、\*いかでか御耳には\*伝へたまひけむ(何処でお耳に伝え聞きなされたのか)、\*心にしめて合はせたまふ(その真髓に適うようにと挽き合わせなさいます)。 \*「大臣」という漢字表記からは公的な立場が感じられて、こうした邸内の描写に違和感を覚えるが、「おとど」という読みからは<殿>という<邸の主人>の響きがある。多分、後者の意図で作者はこの語用をしているかと思うが、話題に「承和の御いましめ」という王家の伝統を窺わせる事項が含まれることと、無関係ではないのかも知れない。 \*「離る(はなる)」は<人と別れる、人を遠ざける>だが、「寝殿」は邸内の正殿であり、その母屋は正夫婦の正寝室なので、この「離る」は<夫人を遠ざけて>となるようだ。 \*「じょうわのおんいましめ」は注に<承和の御戒め。仁明天皇が男子には伝えぬようにと戒めた二種の調合法。「黒方(くろほう)」と「侍従(じじゅう)」である。『河海抄』所引「合香秘方」に「此兩種方不伝男耳。承和仰事也」とある。>とある。「方」は「かた」ではなく「ほう」との読み。この注は必脚であると同時に、こうした王家の伝統を俄かに持ち出す時は、流浪や復権の際の天変地異と神話の引用という今までの例から、この作者をして話が太筋で変わることが示唆しているようで、読者たる私は不案内な王家事情への戸惑いと相まって今後の展開に少なからず緊張する。仁明天皇(にんみゃうてんわう、[810~850] 第54代天皇。在位833~850。)は義兄弟である藤原義房(ふじわらのよしふさ、[804~872])の専制を許し、以って藤原氏の摂関政治体制を開く端緒と成した位置にいた人で、この物語が藤原摂関政治の内情証言の趣きがある事を見ても、その始祖勢力を体現していたと目される人に源氏殿が繋がっている、かを意図した語り口に感じる。「男子には伝えぬようにと戒めた二種の調合法」とは、丸々藤原腹で世継ぎを図るという摂関政治そのもののようにも思え、「二種の調合法」は枕事の秘儀なのか、表と裏で王家を雁字搦めにする政治手法なのか、もっと具体的な指示なのか、いずれにしても含みの多い言い回しだ。 \*「いかでか」は「御戒め」が男子禁制だったという建前に掛けて、どうして男の殿が知っていたのか、という冗句の語り口。真意は、殿こそが王家の伝統を引き継ぐ者だ、とでも言っているかの文意だ。尤も、此处で言う「王家の伝統」とは、実質で<藤原摂関体制に必要な王家の役割>を意味するので、何と源氏殿はピエロの役回りを演じさせられていることになる。悪意とまでは言わないが、道長の頬苦笑みが見えるようだ。 \*「伝

ふ」は<伝える>でもあるが<伝え受ける=伝え聞く>でもあるようだ。元々は<伝わる(広まって行く)>という自動詞だったものが、「伝へ(情報)」という概念の名詞化が未発達なままに他動詞として語用された、ということかも知れない。今となっては分かり難い語用だ。\*「心に沁む」は<既成の物と同様の物の再現を心掛ける>のではなく、形容記述しか残っていない現存しない失われた物を、他との比較記事などを参照しつつ、其れまでの自己の知見を総動員して<最大限に同様であるべくその物の再現を試みる>ということのようで、語意としては<参照資料の心を読む>という意味かと思う。分かり難い語と語用だ。

\*上は(奥様は)、\*東の中の\*放出に(東の対の西側庇を臨時の母屋にして)、御しつらひことに深うしなさせたまひて(間仕切りを殊更に深く目隠しになるように設え為さって)、\*八条の式部卿の御方を伝へて(故事に明るいとされた八条の式部卿の御調合法を伝え聞いて)、かたみに挑み合はせたまふほど(殿と張り合って合わせ香を競い為さるのを)、いみじう秘したまへば(厳重に秘密に為さったので)、\*「うへ」は注に<紫の上をいう。「上」という呼称。>とある。「上」は是が初めての呼称でもない。が、折角なので少し考える。「上」は先ず<天皇>を指す。そして、ざっと敬うべき対象を指す。中でも、貴人の妻については、その家の管理を与る「北の方」を指し、他の夫人方とは違って正夫人・正妻に対する呼称となるらしい。であれば、「北の方(奥方)」をより敬う意味での<奥様>が相応しそうだ。ただ、現代語の「奥様」はごく普通の<奥さん>を丁寧に言っただけの語感なので、特に<最上家の>と心では前振りする必要がありそうだが、此処でそのように明示できないのは、その明示が客観視を意味し、この語用が女房語りの内情説明の口調で、客観的な報告ではないので、明示ではまた語感が違ってしまうからだ。\*「ひんがし」は寢殿が殿に独占されているという文脈から<東の対屋>を意味するようだ。「なか」は何処か。「そと」ではなさそうだ。東の対は南北に長い。東の対は寢殿から見た言い方だから、寢殿の東側に廊下で繋がった別棟であり、その廊下は南側に壁の無い庭が見渡せる透渡殿、北側に上臈の北部屋付きの渡殿の二本があり、突き当たりに棟庇への入り口となる開き扉が寢殿と対屋それぞれに設けられている、と風俗博物館サイトに説明がある。従って、その南北の二本の廊下に挟まれた寢殿から見て東側の、対屋自体から見て西側の縁側および庇の間が「なか」なのだろう。実際に其処には壺庭があり、それは中庭に違いない。\*「放出」は「はなちいで」と読みがあり<寢殿造りで、母屋から張り出した室。また、庇の間を几帳(きちょう)類で区切った部屋。はなちいで。>と大辞泉に説明されている。母屋から仕切りを開け放って庇に出る、ということだろうか。で、其処は本来は御方様の居るべき母屋ではないのだが、特に何かの事情があって其処を臨時の張り出し母屋として使った、のだろうか。一先ずそのように考えて置く。\*「八条の式部卿」は注に<仁明天皇の第七皇子本康親王。>とある。また、<「御方(おんほう)」は黒方と侍従をさす。>ともある。「本康親王(もとやすしんのう)」についてWeb検索すると、「HARP(広島県大学共同リポジトリ)」のサーバに藤河家利昭(ふじこうげ・としあき)広島女学院大学教授の「八条の式部卿について」という考察文が公開されていた。考察文は幾つかの古文書記録を丹念に拾って本康親王の足跡を調べたものらしく、古書原文の資料解読の出来ない私などは、その説明に相当程度の非蓋然性がない限りは、と言っても其の蓋然性に対する私の判定能力自体の頼りなさは問わない訳だが、全面的に依拠したい。で、先ずは親王は、古注の言う仁明天皇の第七ではなく、第五皇子だったらしい。そして親王は七十歳くらいで没し、仁明の六代後の第六十代醍醐天皇の御世まで生きた当時としては長命の人で、地位も最高位の一品親王(いっぽんしんのう)を授かり、薫物に限らず故事全般に造詣が深く尊敬を集めた人だったようだ。また、物語上の設定である紫の上の父宮が式部卿であることに被せて、上が父宮から合わせ香の秘伝を授かったという筋を読者に納得させる語り口のようなだ、と考察文には集約されていた。「被せて」と言ってみたものの、この物語は何も醍醐天皇の御世と規定されたものでも無く、読み方によっては上の父宮を「八条の式部卿」その人だと決め付けても、誰も誤読だとも言い切れないという味わいだ。ざっと踏まえて置きたい。

「\*匂ひの深さ浅さも(同じ黒方と侍従という調合法であっても、其の匂ひの深さや浅さも)、勝ち負けの定めあるべし(勝ち負けを決することにしよう)」 \*殿と上は互いに、自分と相手が共に仁明天皇ゆかりの秘伝の調合法を試みていることを知っている、ということなのだろうか。だとすれば双方共に、自分と相手と同じ黒方と侍従という合わせ香を作っていることを承知している、ということになるので、同じ調合法であっても、更に其の出来栄で優劣を競う、という言い方になりそうだ。この文はそういう意味に見えるが、だとすると、競争の手の内は互いに公然の秘密だが、秘密だという建前で本気の勝負をしていた、ということを示す文みたいなことになって、実際の調合は微妙なサジ加減だから、厳重な仕切りなど意味がなく、手元を隠せば事足りるように思えるが、他意があるのか如何だか、大袈裟な秘密主義はその場の雰囲気伝える為の演出に過ぎないのか、ちょっと掴み所のない文だ。

と大臣のたまふ(と殿は仰る)。人の\*御親げなき御あらそひ心なり(香の優劣は姫君が参内の折に持参する為のものなのだから、殿と上は親として協力して良い物を作れば良さそうなのに、親らしくもなく競争に熱中していました)。いづ方にも(その他の、どちらの御方でも)、御前にさぶらふ人あまたならず(調合に携わる女房は少数で真剣勝負です)。 \*「おんおやげなき」は<両親らしくも無い>という言い方だろうが、この少なからず乱雑に思える、しかし実は馴れ馴れしい生の女房口調に近いのかも知れない、しかし分かり難い女房語りに浸かりきれない私は敢えて口説口説しく補語する。

\*御調度どもも(姫が入内に際して持参なさるべき御道具類の)、\*そこらのきよらを尽くしたまへるなかにも(相当に美しい細工を施しなさっている中でも)、\*香壺の御筥どものやう(香り壺の御箱をいくつも作り)、壺の姿(陶器の壺自体の形や)、火取りの心ばへも(金物の香炉の出来にも気を配り)、目馴れぬさまに(珍しいもので)、今めかしう(新しさのある)、やう変へさせたまへるに(変化を持たせなされたものに)、所々の心を尽くしたまへらむ匂ひどもの(各御方がたが心を込めて調合なされた合わせ香の)、すぐれたらむどもを(優れているであろうものを)、かぎあはせて入れむと思すなりけり(嗅ぎ合わせをした上で壺や箱との組み合わせを考えて、互いに映えるように入れようと御思いになっていたのです)。 \*「みてうど」は<姫が入内に際しての御持参品>らしい。この段は、語り手の息遣いというか、意気込みというか、勢いというか、そういうもので語意が大きく左右されている嫌いがあるようで、もしかすると本当に中臆による作者の口述速記かも知れず、此処の語意も私には分かり難い。 \*「そこら」は「そこばく(其許)」で<其れ相応の質量>。 \*「香壺」は「かうご」と読みがあり<香料を入れておく壺>と古語辞典にある。「御筥ども」は「おんはこども」の読みで<壺を入れておく木箱類>。

## [第二段 二月十日、薫物合せ]

二月の十日(きさらぎのとをか)、雨すこし降りて(小雨の中)、御前近き紅梅盛りに(春の町の庭先の紅梅が今を盛りと咲いて)、色も香も似るものなきほどに(色も香りも例えようもなく心浮き立つ六条院に)、兵部卿宮渡りたまへり(兵部卿宮がお見えになりました)。\*御いそぎの今日明日になりけることども(宮は殿に裳着を明日に控えた式場の整備具合を)、訪らひきこえたまふ(尋ね申し為さいます)。 \*「御いそぎの今日明日になりけることども」は<御準備が今日明日に迫った慌しさ>のように見えるが、「御いそぎ」は<御裳着の御準備>なので、この文は御裳着を明日に控えた今日の訪問なる事を示している。であれば、今さら<慌しさ>にある筈はなく、既に整備されていた式場たる寝殿飾りの進み具合を兵部卿宮は殿に挨拶として尋ねた、のだろう。

昔より取り分きたる御仲なれば(昔から特に仲の良い御兄弟ですので)、隔てなく(殿も気兼ねなく)、\*そのことかのこと(飾り布の謂れなどを具体的にあれこれ)、と聞こえあはせたまひて(と説明なさって)、\*花をめでつつおはするほどに(庭の紅梅との取り合わせを得心していらっしやる所に)、\*前齋院よりとて(前の齋院からということ)、\*散りすきたる梅の枝につけたる御文持て参れり(花ぶりよりも香りを際立たせるようにと、散り空けた梅の枝に結び付けたお手紙を使者が持って参りました)。\*「そのことかのこと」は実際に飾り付けを見ながら彼是と説明した、ということだろうから、裳着会場はこの寝殿であり、庭先との調和を言うところから、母屋よりは庇の間を舞台と考えたい。\*「花」は紅梅をさす。と注にある。\*「さきのさいみん」は注に<朝顔齋院をさす。>とある。朝顔姫君は故前式部卿宮の息女だ。故式部卿宮は故桐壺院の弟宮で源氏殿の叔父に当たる。つまり、殿と姫とは従兄妹だ。また弟宮の息女なので、恐らく姫はせいぜい殿と同じ歳か、むしろ二歳くらいは年下かと私は思っている。それでも、殿は今年で39歳だから、姫も37,8歳くらいなのだろう。二人は十代の頃から意識し合っていて、特に七年前に前太政大臣、藤壺入道宮に続いて姫の父君の前式部卿宮が相次いで死去してからは、懐かしさを募らせてか殿が姫に強く言い寄ったこともあったが、その翌年とは今から六年前だが、忌明けの夏に固辞されて、ついに結ばれずに終わった、という間柄だ。\*「散りすきたる梅の枝」は<花がほとんど散って空けた梅の枝>。注には<『異本紫明抄』は「春過ぎて散りはてにける梅の花ただ香ばかりぞ枝に残れる」(拾遺集雑春、一〇六三、如覚法師)を指摘する。その歌の詞書に「比叡の山に住みはべりけるころ、人の薫物を乞ひてはべりければ、はべりけるまゝに、少しを、梅の花のわづかに散り残りてはべる枝につけてつかはしける」とある。その趣向を踏まえる。『集成』は「散り過ぎたる」と解し、『完訳』は「散りすきたる」と解す。>とある。必脚だ。

宮(宮は殿と朝顔齋院との文通騒動を)、\*聞こしめすこともあれば(以前から御聞き知りなさいたので)、\*「聞こしめすこともあれば」は逐語で言い換えれば<お聞きになっていたことも有るので>だろうが、これは殿の好き心に近親の弟宮としての揶揄を込めた軽口の言い回しで、原文の息遣いがあるこそ読者が感じ取れる、という正に原文を読む意味を示す文であり、文意としては下に「御消息のすすみ(御文通の進展)」とあるので<殿と前齋院との文通騒動を聞き知りなさいたので>であり、言い換えとしては先ずは其の明示に努めたい。注には、この文意を<源氏が朝顔姫君に執心であったということ。「朝顔」巻に語られている。>とある。が、今からは七年前の話である朝顔巻では、父宮亡き後に其の服喪で齋院を退下した朝顔君に、君が神職を辞したことを良いことに殿が改めて言い寄るという展開で、相変わらず君は殿の誘いを断り続けた訳だ。確かに其の際に、兵部卿宮が殿の性懲りの無さを弟宮として半ば呆れ顔で眺めていたという事はあったかも知れない。だとしても、より社会的な話題の大きさという点で言えば、十六年前の故院の崩御の翌年の、そして十三年前の殿の失権にも繋がった、十五年前の紫野院で朱雀帝の名代として潔齋中の朝顔齋院に恋文を差し出したという、殿の奔放さというか非常識な振る舞いと、其れに返歌を返してしまった朝顔齋院の気の弛み、からなる文通騒動への藤原右家からの悪評が思い起こされて然るべきかと思う。須磨への流浪は、直接には時の尚侍の君であった藤原六姫に殿が手を出したと其れが余りにも大胆な形で右大臣に露見してしまったことに拠るが、朝廷による殿への無官制裁処分 of 社会的説得力に齋院との文通騒動があったことは、賢木巻第七章第二段の時の右大臣の弁に「男の例とはいひながら、大将もいとけしからぬ御心なりけり。齋院をもなほ聞こえ犯しつつ、忍びに御文通はしなどして、けしきあることなど、人の語りはべりしをも、世のためのみにもあらず、我がためもよかるまじきことなれば、よもさる思ひやりになきわざ、し出でられじとなむ、時の有職と天の下をなびかしたまへるさま、ことなめれば、大将の御心を、疑ひはべらざりつる」とあり、是は右大臣が六姫を庇って源氏殿一人を悪者に仕立てたい言い方ではあるものの、齋院を悩ませてはヤンチャも過ぎるとの世評があったことが示されており、その事を踏まえてこそ殿の<性懲りの無さ>を揶揄する甲斐が有るといふものだ。ただ、七年前の歌の贈答に関して、紫君が身分の高い朝顔君に対して危機感

を抱いた、という記事があつて、例えば受領家の明石君のような、王族の自分に比べて身分が低い者に対しては、自分の正妻たる地位が脅かされる恐れは無いが、故院の弟宮家の姫であつてみれば、自分の地位が追い遣られる恐れが有るといふ、身分社会構造そのままの高慢さ、とも言えるが、逃れようもない身分認識からして素直な反応、とも言えそうな、紫君の苦悩が描かれていたことは印象深い。腹違いの姉である、右大将の前の北の方の悲劇も思い起こされるどころだ。

「いかなる\*御消息のすすみ参れるにか(何処まで御文通が進んで来ていらっしゃるのですか)」  
\*「おんせうそこのすすみ」は前項ノートでも触れてしまつたが<御文通の進展>と読むべきだ。「せうそこ」は<事情、様子、安否確認>であり、其れを知らせる<報告、手紙>であり、特に古文では<他家を訪れて、来意を告げ、案内をこうこと。(大辞泉)>を言う事があるようで、場面ごとに意味を取らなければならない語だが、此処では宮の口ぶりからして底意に嘗ての<齋院との文通騒動>があるので<文通>に他ならない。

とて、をかしと思したれば(興味を示しなされたので)、ほほ笑みて(殿は受け流すように軽く笑つて)、

「いと馴れ馴れしきこと聞こえつれたりしを(ごく内輪の頼みごとをお願いした所)、まめやかに急ぎものしたまへるなめり(親切に直ぐに用立てて頂けたようです)」

とて、御文は引き隠したまひつ(お手紙は袂に隠してしまいました)。

\*沈の筥に(貴重な沈の木箱に)、\*瑠璃の坏(るりのつき、ガラス製の器を)二つ据ゑて(二つ据え置いてあつて)、大きにまろがしつつか入れたまへり(合わせ香を大きな練り玉にして入れていらつしやいました)。 \*「沈(ちん)」は「沈香(ちんかう)」のこととあり、「沈香」は<じんちょうげ科の常緑樹木。熱帯地方に産する。高さ約10尺。花は白色。材は芯が堅く重く、水に沈む。沈水香。>と古語辞典にある。貴重品らしい。 \*「るり」は今となっては現存製品が珍しい古ガラスで、当時なら舶来の珍重された<ガラス質性のもの>らしい。「つき」は<古代の飲食物を盛る器で、碗より浅く皿より深いもの。材質は土器・陶器や木製などがあり、脚の付いたものや蓋のあるものもある。>と大辞泉にある。

\*心葉(器に付けた飾り枝も)、\*紺瑠璃には五葉の枝(紺の器には黒方を示す松の枝を)、白きには梅を選びて(白い器には梅花香を示す梅の枝を選んで)、同じくひき結びたる\*糸のさまも(其の枝と同じように器の脚に結び付けてある糸のように細長い御詠歌の紙も)、なよびやかになまめかしうぞしたまへる(風になびくほど柔らかい物腰にしていらつしやいます)。 \*「こころば」は<贈り物に添える飾り物>らしいが、この場合は品物が練り香なので、見た目だけでは香りが分からず、其の香の名札として正に「心葉(意の言葉)」を表したもののなのだろう。また、「飾り物」は小細工を施した作り物でより遊び心を示すことも有れば、生花木で情緒を演出することもあつたらしい。 \*「こんるり」については、前項の「瑠璃の坏二つ」の注に<紺瑠璃と白瑠璃の坏、二脚。前者に黒方、後者に梅花香が入れてある。>とある。五葉松の枝が黒いので「黒方」を表し、梅の枝は「梅花香(ばいくわかう)」を表す、ということらしい。香に無縁な私には、全く実感が持てない内容の話だ。 \*「いと」は比喩表現に違いない。「同じく」が<飾り枝と同様に>を意味するのと、下に齋院からの贈歌が示されるので、是が<糸のように細長く裂かれた歌の書かれた料紙>と分かる。

「艶あるもののさまかな(宮びな為さり方ですね)」

とて、御目止めたまへるに(御目を止めなさって)、

「花の香は散りにし枝にとまらねど、うつらむ袖に浅くしまめや」(和歌 32-01)

「枯れた枝でも残り香を、あなたの袖に染ませたい」(意識 32-01)

\*短冊よりも細い、まるでテープのような紙に書かれた前斎院から明石姫への贈歌、ということらしい。枯れ枝の頼り無さと控え目の奥ゆかしさを同時に示そうとした演出、だろうか。注には<「散りにし枝」は自分(朝顔)を譬え、「うつらむ袖」は明石姫君を喩える。「浅くしま」「め」(推量の助動詞)「や」(係助詞)、反語表現。浅く薫りましょうか、いや深く薫ることでしょうの意。『集成』は「自分を卑下し、姫君の若さを讃えた歌」という。>とある。ただ私は、「や」を反語の係助詞とは思わない。「や」は「よう(様)」の音便で、或る一定の<様=状態、形状>を意識した物の言い方だから、其の形態に至る事の成り行きを殊更に問題視して、当該対象事物の動向に疑問や反論を示す文脈に使われることは多いだろうが、其の形態に素直に感嘆を示す語用例も多く認められている、斯かる動向に対して命令や願望を示すことも有り得る筈だ。私は、この「浅くしまめや」を<少しでも染みます様に>という願いを込めたお祝いの言葉と解したい。

\*ほのかなるを御覧じつけて(とある前斎院の歌の薄い字を見つめなさって)、宮はことごとしう誦じたまふ(宮は感心したように音読なさいます)。\*「ほのかなる」は<薄墨でうっすらと書いてある筆跡。>とある。奥ゆかしさ、なのだろう。

宰相中将(大臣の子息である宰相中将が姫の兄として)、御使\*尋ねとどめさせたまひて(桃園宮からの御使者を縁側に引き止めて庇で応対なさって)、いたう酔はしたまふ(さかんに御酒をすすめて酔わせなさいます)。\*紅梅襲の唐の細長添へたる女の装束かづけたまふ(殿は姫の祝いということで、御使者に紅梅襲の唐織の飾り布を添えた女装束の一揃えを褒美に与えなさいます)。御返りもその色の紙にて(御返信も紅梅色の紙に)、御前の花を折らせてつけさせたまふ(前庭の梅の花を折らせて結び付けさせなさいます)。\*「たづぬ」は<捜し出す>とか<訪問する>という場合も多いようだが、此处では<家の者として使者に素性などを問い質す>という立場に源中将が居たとして、実際には庇で応対して<話を聞く>のだろう。だから、「とどめさす」も<使者を濡れ縁に引き止める>立場で<話をする>のだろう。\*「こうばいがさねのからのほそなが」は其の実体が分からない。それでも、何かしらの実体があったくらいには考えて置きたい。「紅梅襲」は表が紅梅(明るい赤)色で裏が蘇芳(赤茶)色、とあるので袷地だろうか。「唐」が地紋を作る綾織だとしたら、「紅梅襲」は蘇芳の横糸に紅梅の縦糸を織り込んだ単地かも知れない。「細長」は唐衣の略装のように羽織った飾り布のようだから、さして仕立てらしい縫製も無く、着用していない時はほとんど生地のような状態だったのではないだろうか。

宮(宮は)、「うちのこと思ひやらるる御文かな(中身が気になるお手紙ですね)。何ごとの\*隠ろへあるにか(どんな隠し事があるのか)、深く隠したまふ(しっかり隠しなさい)」と恨みて(と不満そうに)、いとゆかしと思したり(とても知りたく御思いでした)。\*「隠ろへ」は「隠ろふ」(「動ハ下二」隠れている、隠している)の連用形中止の名詞化で<隠している事=隠し事>の意味らしい。しかし、「隠ろふ」は今に伝わっていない語で分かり難い。で、大辞泉によると「隠ろふ」は「隠らふ」の音便とある。「隠らふ」は<[連語]《動詞「かく(隠)る」(四段)の未然形+反復継続の助動詞「ふ」。上代語》隠れつづける。かくろう。>



とある。ということは、現代語に「隠し続け事」という言い方があったなら、それが「隠ろへ」の語感に近付いたのかも知れない。マ、そんなところのようだ。

「何ごとかはべらむ(何も特別な秘密などありません。ただ手紙は個人的な間柄で交わすもので人に見せびらかすものではないので)。隈々しく思したるこそ(隠し事があるなどと詮索されることこそ)、苦しけれ(心外です)」

とて、\*御硯のついでに(斎院宮へのお返事を書いた硯箱がまだ片付けずに手元にあったので)、\*「おんすずりのついで」については、渋谷訳文は「御筆のついでに」と未考察で、与謝野訳文は「(殿は)斎院へ今書いた歌をまた紙にしたためて宮へお見せした。」という解釈をなさっている。殿が斎院宮へ歌を贈ったことは多分間違いないのだろうが、もし返歌であれば、それは明石姫の代返か、此処では公開されていない「引き隠したまひつ」る「御文」に認められていた斎院から殿への贈歌に対する返歌なのであり、いずれにしても、下の歌を斎院の明石姫宛ての贈歌に対する殿の返歌とは見做さない方が無難かと思う。下の歌は、殿が斎院への返書に認めた歌とは別の、詮索好きの宮に、そんなに知りたいなら、ハイどうぞ、とその場で改めて作って見せた歌なのだろう。いや、その場では、殿が「こう書いたんだよ」と宮に言ったという事はあったかも知れないが、其れが冗談なのは宮にも分かる空気感だった筈だ。だから、「御硯のついでに」は文字通り<斎院に御返事を書いた序でに、もう一筆取って>で、宮を煙ならぬ墨に巻いた、というイカがかなの筋なのだろう。

「花の枝にいとど心をしむるかな、人のとがめむ香をばつつめど」(和歌 32-02)

「香りが誘う花の枝、見ない振りしているけれど」(意識 32-02)

\*注に<源氏の返歌。「花の枝」は朝顔を譬える。ますます魅力を感じるという意。「梅の花立ち寄るばかりありしより人のとがむる香にぞしみぬる」(古今集春上、三五、読人しらず)「梅の花香を吹きかくる春風に心をそめば人やとがめむ」(後撰集春上、三一、読人しらず)>とある。が、前項ノートで既述した様に、私はこの歌は、殿が弟宮に対して書いて見せた冗句なのであり、本当に斎院宮に宛てた歌とは別物だと思う。それに、この歌は「とやありつらむ」とあって、本当に源氏殿が詠んだのかどうかも不明だし、むしろ語り手の憶測でこんなふうには詠んだのかも知れない、くらいの言い方にさえ見える。いずれにせよ、是は源氏殿の本心の歌ではなく、宮の好奇心に応えて、「ご推察の通り私は朝顔君にますます恋慕が募ります、妻には内緒ですけど」と言っただけで、そして二人で爆笑した、みたいな場面でしょ。「梅の花」は<春先の新しい女>で明石姫にも通じそうだが、引歌では浮気の相手の語感。「心を染む(しむ、そむ)」「香をば包む」「香にぞ染む」は<女に気が移る>。「人の咎む」は<妻が浮気を責める>。確かに、「梅の花」を「花の枝」に変えたのは前斎院からの「心葉」に応えた、ということだろうが、そういう工夫があってこそ冗談は成立する。

とやありつらむ(とでも殿は宮に書いて見せなされたのかも知れません)。

「\*まめやかには(姫の裳着式を親らしく手堅く執り行う見地からは)、好き好きしきやうなれど(遠縁に当たる前斎院に合わせ香を依頼するのは遊びが過ぎるようだけれども)、またもなかめる人の上にて(二人としない愛娘のことなので)、これこそは\*ことわりのいとなみなめれと(これこそが当家らしい由緒ある様式の式次第になるようにと)、思ひたまへなしてなむ(古式に明るいと思われる方々にご相談申し上げねばと、存知まして致した次第です)。\*「まめやかには好き好きしきやうなれど」は注に<『集成』は「(薫物合せなどを方々に依頼するのは)物好きのようですが」の意に解し、

『完訳』は「薫物合せへの熱中は物好きに過ぎるようだが、の意」と解す。＞とある。大体が、是が薫物合わせのこと、また其の為に前齋院に合わせ香の作成を依頼した源氏殿自身の言動に対する形容句だ、ということ自体が分かり難い。それでも、「宮～とやありつらむ。」を一寸した笑い話の挿入句と見れば、齋院の使者を送り出して一呼吸置いた後に、殿が弟宮に改めて、齋院に練り香を依頼した理由を説明する、という場面は自然な流れなのかも知れない。ただ、いつに無く、この帖なのか、この章なのか、語り手の息遣いというか、意気込みというか、その語り口の間が私には掴めず、妙に内容が分かり難い文が続く。その上で、この「まめやかには」は更に分かり難い言い回しだ。そこでもう一度、殿は何の為に「まめやかに」なるべきだったのかを考える。と、この文は「薫物合わせ」や「練り香」を含めて、それらが全て明石姫の裳着式およびその成功を願っての殿の弁であることが知れる。だから、その事から補語する。＊「ことわりのいとなみ」は＜由緒ある式次第＞だが、それを「これこそは」と意気込む殿の自負に注目したい。既に何度もノートしてきているが、源氏殿は底意に王政復古を抱いていて、藤原氏の摂関体制に一矢報いたいと夢想する。が、殿自身が撫子に囚われた様に、今回の右大将の強奪を許した現実に藤原氏の実力を思い知った。であれば、形骸化した天皇家の威信に成り代わって、太政大臣の自分こそが王家の輝きを体現する他は無い、と改めて闘志を漲らせた、のかも知れない。しかし、だというのに、表立って王家を名乗れない臣下であるという逆説。王朝文学の真骨頂を此処に見る思いだ。しかも、この構図、この社会構造が今のこの国にも残っているというのは驚きだが、同時に権力闘争の本質は古今東西変わらないという人間のサガを見る思いもする。むしろ問題は、この物語にある明け透けさが、今日では堅く隠蔽されているという、文化の大衆化が持つ社会の陰湿さに暗澹たる失望を覚える。公に出来ない個人の本音(それを公表した途端に情報が客体化して変質してしまう、それは個人が自分の思いを「口外したくない」という気持ちだけでなく、本質的に個人の思い自体はその個人の行動を左右するのみなのであって、客観的にはその個人の志向性を其の動向の予測事項として認識するに過ぎない、という感性自体は原理的に客観的な理解は不可能で、社会が客観的に共有できるのは概念でしかない、という言葉自体の概念規定も含めて)を、公にしないで済む(とは個人の秘匿が許容された上で社会的な公平性が担保される)ような制度設計と共に、そうした社会組織構成員各位の認識を実現させる文化や文学の構築力に期待したい。言葉を弄するのは、遊びを含めて思考訓練として有用だし必要だが、その記号が持つ社会的な共有概念が個人の生死を軽視せずに尊重していてこそ、人類の貴重な財産たりうる事は自明だ。

＊いと醜ければ(式典に粗相があるとしたら)、＊疎き人はかたはらいたさに(不慣れな人を介添え役にしているのは不都合なので)、中宮まかでさせたてまつりてと思ひたまふる(中宮に御所から御出座し頂いてお役目をお願いしたいと考えております)。＊「いと醜ければ」は注に＜娘の明石姫君の器量をさしていう。源氏の謙辞。＞とある。が、帝妃候補である明石姫は卑下の対象では有り得ない。姫を明石君から引き離して紫君が本家の子として育て始めた時から、源氏家にとっては姫は朝廷から預かった御子なのであり、源氏殿をして姫を下にも置かぬ待遇をし、であったればこそ明石一族は涙を飲んだ。勿論、それは源氏家が勝手に腹積もりしたことで、客観的には願望でしかない。だからこそ、今こそ其の願いを入内によって叶える時と、源氏家は挙げて此の裳着の成功を画策する。此処は正にその場面だ。実際、語法からしても敬語表現が無いのだから「みにくし」の対象は姫では無い。また当然にも、文法上でも誤りは指摘できる。「見難けれ」は「見難し」の已然形なので、助詞「ば」は＜～なので＞という未然形を受けた理由説明を示す意味にはならず、＜～としたら＞という仮定条件を示す意味になる。また、「見難し」は＜見るに堪え無い、見苦しい、見つとも無い＞だが、この「見る」は＜見た目の印象＞だけを意味せず＜見合う＝認識が合致する＞ことでもあり、「みにくし」は＜相応しく無い＞でもある。元々、この殿の弁は裳着の式次第を話題にしているので、「いと醜ければ」は＜酷く体裁の悪い式になってしまうとしたら＞であり、「疎き人は傍ら痛いさに(式典に不案内な人を起用するのは不都合なので)」こそが理由説明だ。などということ、私がノートしていること自体を危惧する。＊「疎し」は＜親しみが無い＞ではなく＜物事に疎い＝不慣れ

>で、何に「不慣れ」なのかと言えは<裳着の式典に>であり、それなりに果たすべき役割に付いて<分かっていない事に>であり、その役割とは<腰結いの役>らしい。ただ、此処の文面からだけでは「腰結い」までは読めないが、当時の常識からは、そう読むべきらしい。

親しきほどに馴れきこえかよへど(身内の間柄で親しみ申して来ていますが)、恥づかしきところの深うおはする宮なれば(高貴さを深く備えていらっしゃる中宮なので)、何ごとも世の常にて見せたてまつらむ(このような世常の慣わしにご出席いただくのは)、かたじけなくてなむ(畏れ多いことです)」

など、聞こえたまふ(殿は弟宮にお話しなさいます)。

「\*あえものも(あやかり物も)、げに(確かに)、かならず思し寄るべきことなりけり(必ず願いが適うように考えておくべき事なのでしょうね)」 \*「あえもの」は<あやかりもの>とある。中宮に肖って、中宮に成る事を願う、其れが実際に出来てしまうとは、呆れた雲上振り。注にも<螢兵部卿宮の詞。「あえもの」は、あやかりもの、の意。「げに」は源氏の真意を理解して発した言葉。おっしゃる通り将来の中宮の位ということなのですね、の意。>とある。

と、ことわり申したまふ(納得なさいます)。

### [第三段 御方々の薫物]

\*このついでに(予定通りに前齋院から香が届けられ、兵部卿宮がお見えになっていた)、御方々の合はせたまふども(各御夫人方の調合なさった練り香どもを召すべく)、おのおの御使して(殿が各部屋に遣いを差し向けて)、 \*「このついで」は<この機会>ではない。「ついで」は「次いで」であり、本義は<式次第の順序に従って>であり、此処はその本義で語用されている。「ついで」を<事のついで(偶々の好機に片手間に)>の意味で語用するのは、この本義を踏まえた洒落言葉であり、実際にそうした言い方には正式の語用では無い軽口の語感がある。

「\*この夕暮れのしめりにこころみむ(本日の夕方小雨で気圧の変化が収まって風が落ち着いた時分に薫物合わせを行います)」と聞こえたまへれば(と裳着式への導入の始まりをお知らせなさったので)、さまさまをかしうしなして奉りたまへり(御方々はそれぞれ器や箱に趣向を凝らして持ち寄り致しなさいました)。 \*「この夕暮れのしめりに」の「しめり」は<雨上がりの落ち着いた風向き>だけでなく、先付けによる口の「湿り=口開き」という<裳着に先立つ行事の始まり>を含意するように見える。というのは、「この夕暮れ」が雨上がりであろうと、初めから晴天であろうと、引き続き雨模様であろうと、「こころみ」は必ず行なわれることに成っていたのであり、作者が態々この文句を掲載した意図は、この言い方で<裳着式の前段の開始>を洒落た言い回しで示せると踏んだからなのだろう。

「これ分かせたまへ(これらの優劣を判定してください)。\*誰れにか見せむ(あなたの他に、誰に頼めましょう。他に適任者はいません)」 \*「たれにかみせん」は注に<源氏の詞。「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」(古今集春上、三八、紀友則)>とある。「たれにか」だけでも<あなたを置いて他には誰も>という反語表現だが、この和歌を下敷きにしなかったら、少なくとも「君ならで誰にか見せむ」くらいは言うべきなのかも知れない。しかし、この印象句だけを言うことで、逆にこの歌を意識させて「知る人ぞ知

る」べき味の有る判定をして呉れ、とまで含意させた言い回しを殿はした、ということらしい。下に其の意を踏まえた宮の応答がある。当時の実践和歌教室の呈だろうか。

と聞こえたまひて(と殿は宮に頼み申しなさって)、御火取りども召して(香炉を用意させて)、こころみさせたまふ(嗅ぎ比べをさせなさいませう)。

「\*知る人にもあらずや(私などは物知りではないのですが)」 \*「知る人」は注に<蛭兵部卿宮の返事。「君ならで」歌の文句を引用して答える。>とある。

と卑下したまへど(と謙遜なさいませう)、言ひ知らぬ匂ひどもの(何とも言えない芳香が立ち込める中で)、進み遅れたる香一種などが(各成分の多い少ないで分かれる香料の練り合わせたものの一つ一つを)、いささかの咎を分きて(ほんの僅かな違いを嗅ぎ分けて)、あながちに劣りまじりのけぢめをおきたまふ(宮は敢えて優劣を付けて行きなさいませう)。

かのわが\*御二種のは(あの殿の仁明帝御秘伝の二種類の練り香は)、今ぞ\*取う出させたまふ(今から取り出させなさいませう)。 \*「おんふたくさ」は<承和の御秘伝>の「御」。注には<「承和の御いましめの二つの方」の「黒方」と「侍従」の香。>とある。 \*「取う出(とうで)」は<下二段動詞「取り出づ(とりいづ、取り出す・抜き出す・選び出す)」の未然形・連用形「とりいで」の音便。>と古語辞典にある。漢字カナ表記があるので分かり易いが、仮名表記だけだったら分かりにくそうだ。

\*右近の陣の\*御溝水のほとりに\*なずらへて(承和の御時に練り香を右近陣屋前の側溝近くに数日埋めて寝かせたという相伝に習って)、西の渡殿の下より出づる汀近う埋ませたまへるを(殿が西の渡殿の下から流れ出ている遣り水の水際近くに埋めさせ為さっていた練り香を)、\*惟光の宰相の子の兵衛尉(惟光参議の息子の兵衛府三等官が)、掘りて参れり(掘り出して来ました)。 \*「うこんのじん」は「源氏の部屋」サイトの「内裏を歩く」コーナーの「校書殿」ページに詳しく図説されていた。大辞泉には「けうしょでん」は<平安京内裏十七殿の一。清涼殿(せいりょうでん)の南、安福殿の北にある。歴代の書物を保管した。文殿(ふみどの・ふどの)。>とあるが、図説では主たる領域が蔵人所に占められているのが良く分かった。右近陣屋は校書殿の東南の一角だったらしい。 \*「みかはみず」は<宮中の庭を流れる溝の水。御溝(みかわ)。>と大辞林にあるが、清涼殿縁側前の側溝に、形こそドブ川のようなが決して然に非ず、清水が涼やかに流れて滝口に落ちるといのがあって、その校書殿版のことらしい。 \*「準へる」については、注に<『河海抄』に「承和御時、右近陣の御溝の辺の地にうづまる。後代相伝して其所をたがへず云々」とある。承和の御時になぞらえた趣向。>とある。今で言う<冷暗所に保管>ということか。まさか練り香が発酵菌でアミノ酸醸成されるとは思えないが、うどん玉を寝かせるように余熱除去を図り地中で熟成させる、と言った辺りだろうか。 \*惟光は宰相(参議)に昇進。その子も兵衛尉の任官。初出。と注にある。参議は四位とあるので相当な高官だ。「ひやうゑのじょう」の「ジョウ」は律令制に於ける管理官の四等序列で、長官のカミ(督)、次官のスケ(佐)、に次ぐ三番目で、四等官のサクワン(志)を差配する地位で、兵衛府のジョウは(尉)と表記されるとのこと。官位相当表では七位と低い身分だが、警察官僚の端くれには違いない。ところで、惟光は久しぶりの登場で、前回は少女巻第六章の五節舞姫の父親としてだった。その時の記事は「殿の舞姫は、惟光朝臣の、津守にて左京大夫かけたるが女、容貌などいとをかしげなる聞こえあるを召す。」とあり、即ち惟光は摂津国守にして左京区警察庁長官という地位だった。それが今や警察官僚という行政官を超えて参議という太政官に収まっているという出世振りだが、源氏太政大臣の腹心なのだから当然の成り行きだ。さて、その五節舞は今から六年前の、斎宮女御の立后と源氏殿の太政大臣就任と藤原殿の内大臣就任で

体制が固まった年の新嘗祭の行事の一環として十一月に盛大に執り行われた。そして、既にその時点で内大臣は、弘徽殿女御の立后が適わなかったことを惜しんで、皇太子の元服時に二の姫を入内させることを望んだが、その姫が今の源中将と内通して、それも断念せざるを得ず、内大臣は意固地に二人の仲を認めないというのが少女巻第三章から第五章までの話だった。その皇太子の元服が愈々この二月であり、続いて明石姫の入内となる運び、という今の場面だ。さらに少女巻第六章には、源中将(時の大学君)が五節舞姫を見初めて、童殿上だった舞姫の弟君に恋文を託したとあり、姉弟でその手紙を見ている所に父親の惟光がやって来て見つかったが、惟光は源氏君の手紙を喜んで母親にも見せて、舞姫を宮仕えは止めにして源君に奉ろうと思ったが家族は取り合わなかった、というホーム・コメディ風のオチに話は成っていたが、そう言えば、舞姫と源君の二人の仲はその後どうなっているのだろう。それきり何の記事もない。それと弟君だが、大学君と同じ年の仲良しと書かれていて、それがこの兵衛尉に違いない。そう思うと、次の一文も感慨深い。

宰相中将(それを源氏中将が)、取りて伝へ参らせたまふ(縁側で受け取って庇の間に持って参り為さいます)。

宮、「いと苦しき\*判者にも当たりてはべるかな(これは難しい判定物に当たってしまいましたね)。\*いと煙たしや(いや香だけに煙で見分けがつきません)」と、悩みたまふ(困りなさる)。\*「はんじゃ」は<判定者>であり、宮が自分のことを言っている、かのように訳文はある。そういう言い方なのかも知れない。が、文意は殿の香を判じなければならぬ<順番・段取りになったこと>に宮は困った、ということなのだろう。であれば、「判者」は<判定すべき対象物>という読み方は成立する、ように思う。\*「けぶたし」は<香が煙たい>ことと<煙で前が見えない→判定しにくい>こととを掛けた冗談だ。

同じうこそは(同じ処方合わせ香は)、いづくにも散りつつ広ざるべかめるを(国中に伝わって広まっているでしょうが)、人びとの心々に合はせたまへる(人それぞれのサジ加減で作りなされた練り香の)、深さ浅さを(深い浅いの趣きの違いを)、かぎあはせたまへるに(嗅ぎ比べなされば)、いと興あること多かり(宮にはさぞ興味深い味わいが多くあったことでしょう)。

さらにいづれともなき中に(その上でいづれ劣るともない優れた品々の中で)、齋院の御黒方(さいみんのおんくろほう、齋院の黒方香が)、\*さいへども(‘散りにし枝’とは言うものの)、心にくくしづやかなる匂ひ(奥ゆかしく落ち着いた芳香は)、ことなり(格別です)。\*「さいへども」は注に<前齋院が和歌で謙遜していたことをさす。>とある。和歌は「花の香は散りにし枝にとまらねど移らむ袖に浅くしまめや」(和歌 32-01)。

侍従は(侍従香は)、大臣の御は(大臣の御品が)、すぐれてなまめかしうなつかしき香なりと定めたまふ(特に上品で由緒が偲ばれる香りと定めなさいます)。

\*対の上の御は(東の対で調合した紫の上の御品は)、\*三種ある中に(黒方・侍従・梅花の三種がある中で)、梅花(梅花方が)、はなやかに今めかしう(華やかで新しく)、すこし\*はやく心しつらひを添へて(少し鋭く香り立つ趣向にして)、めづらしき\*薫り加はれり(目新しい情緒が加わっていました)。\*「たいのうへ」は<紫の上>だろうが、「上」は<邸の主人・女主人>の語感なので「対(対屋)」に規定された一般的な呼称だとしたら違和感を覚える。此处では、東の対で練り香を調合したという話題を受けての一時的な語用と解したい。しかし、そうであるなら、やはり「上の御は」とあるべきで、「対の上の御」と当たり前

のように言う言い方に他意があるような気がして妙に気になる。今後注意したい。普通に気持ち悪い。 \*「みくさ」は注にく黒方、侍従、梅香をさす。「黒方」は冬の香、「心にくくしづやかなる匂い」。「侍従」は秋の香、「なまめかしくなつかしき香」。「梅花」は春の香、「はなやかに今めかし」とある。>とある。「梅花(ばいくわ)」については、「梅花香」はく梅の花の匂いのする水油。「梅花の油」に同じ。>と古語辞典にあり、薫物としては「梅花方」の名称が指摘されているので、従う。 \*「早し」はく香がきつい。激しい。>と古語辞典にあり、訳文の「鋭い」に従う。「心しつらひ」はく意向、趣向>かと思う。 \*「薫り(かをり)」はく香り>ではあるだろうが、薫物によってく漂う気=雰囲気=情緒>でもあるのだろう。

「\*このころの風にたぐへむには(今の季節の風に相応しいのは)、さらにこれにまさる匂ひあらし(やはり是に勝る匂ひはないでしょう)」とめでたまふ(と宮は上の梅花方を讃えなさいます)。  
\*「このころ」は注にく蛸宮の梅香に対する批評。梅香方は春の香である。「風にたぐへむ」は「花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯誘ふしるべにはやる」(古今集春上、一三、紀友則)を踏まえる。>とある。「花の香」は「風の便りに類へてぞ(季節柄の手紙に添わせることで)」とあるので、手紙のく添え木>を思わせる。ウグヒスは「春告げ鳥」だから、この「添え木」はく梅の枝>に違いない。「類ふ」はこの場合く伴う>だが、ウグイスを誘い出す「標には遣る(合図として差し出す)」のだからく春に相応しい>を意味する。尤も、「類ふ」の語だけでもく似合う=相応しい>の意味は通るが、引歌を踏まえることで情緒は深まる。

夏の御方には(夏の町の花散る里の御方におかれては)、人びとの(各御部屋様方が)、かう心々に挑みたまふなる中に(このように工夫を凝らして競り合いなさる中に)、数々にも立ち出でずやと(とても太刀打ち出来るものではないと)、煙をさへ思ひ消えたまへる御心にて(教養高く練り香にも造詣深くいらっしゃるだろうに、取り立てた煙の一筋さえ立てなさない御積もりで)、ただ\*荷葉を一種合はせたまへり(ただ荷葉の一草を合わせなさっていました)。さま変はりしめやかなる香して(他の物とは一風変わった落ち着いた趣きで)、あはれになつかし(しみじみと心惹かれます)。 \*「荷葉(かえふ、かよう)」はくハスの葉。>のことであり、またく練り香の名。六種(むくさ)の薫物(たきもの)の一。ハスの花の香に似せたものという。夏の薫物。>と大辞林にある。

冬の御方にも(冬の町の明石の御方におかれても)、\*時々によれる匂ひの定まれるに\*消たれむもあいなしと思して(季節ごとの香の定番を競って名立たる貴人方に後れを取るのも名折れに思いなさって)、\*薫衣香の方のすぐれたるは(むしろ日常に用いる薫衣香の処方の特上のものは)、\*前の朱雀院のをうつさせたまひて(前の朱雀院の御香の再現を時の朱雀帝が命じなさって)、公忠朝臣の(時の蔵人の源公忠が承り)、ことに選び仕うまつれりし百歩の方など思ひ得て(特別に原料を厳選して調合奉った百歩という配合処方だと考え付きなさって)、世に似ずなまめかしさを取り集めたる(世にまたと無い高貴な成分を取り集めていて)、心おきてすぐれたり(その着想が素晴らしいと)、いづれをも無徳ならず定めたまふを(いずれも深い気持ちと知識が込められていると判定なさる宮を)、 \*「時々によれる匂ひ」は注にく『完訳』は「黒方が冬、侍従が秋、梅花が春、荷葉が夏などと季節が一定。その型どおりの調合では他に圧倒されよう、そこで一趣向を案出」と注す。>とある。  
\*【消たれむは】—「は」(係助詞)際立たせるニュアンスが加わる。「消つ」は「薫物」の縁でいう。と注にある。  
\*「薫衣香(くぬえかう)」はく衣服にたきしめるための薫物(たきもの)。沈香(じんこう)・白檀(びやくだん)・丁香(ちようじこう)・麝香(じゃこう)などを練り合わせたもの。くぬえこう。くえんこう。《季夏》>と大辞泉にある。  
\*「さきのしゅじゃくゐん」は「前の」とあるのだから、今の「朱雀院(すざくゐん、源氏殿の兄院)」ではなさそうだ。かと言って、それを追号とする朱雀天皇(在位 930-946)という史実の特定人物と決め付けるのも、この物語の口調に

馴染まない。かと言って、全く架空の人物を引く意味は全く無い。そこで非常に面倒だが、少し概要を知る為に Wikipedia で「朱雀院」を引くと朱雀院(すざくいん)は、平安時代の天皇の累代の後院(ごいん、譲位後の御所)の一つ。朱雀大路西、三条南・四条北に位置し、右京四条一坊東の8町を占めた(これは大内裏に次ぐ規模である)。建物は寝殿造で、内裏に準じて仁寿殿、宜陽殿などもあったことが知られる。嵯峨天皇[在位 809-823]の時代(承和年間頃)に成立したと見られ、宇多天皇[在位 887-897]が整備して譲位後に居住。後に朱雀天皇が修理、同じく譲位後に居住した。天曆4年(950年)火災に遭い、その後村上天皇[在位 946-967]により再興。しかし円融天皇[在位 969-984]以降は後院として使われることはなく次第に荒廃、その役割を里内裏に譲った。([在位]は拙補)と纏められてあって、この物語の設定に桐壺帝が宇多の御時の施政に習う姿勢であるとされ、執筆時の一条期では昔語りとされることから、物語に参照される史実の「朱雀院」は宇多天皇か朱雀天皇ではありそうだが、この女房語りの傾向からして、その参照部分は史実上の役割と言うよりは伝聞逸話に基づく人物印象なのだろう。何故なら、源氏殿の不遇を道真の大宰府左遷に準えてみると、史実の左遷は朱雀天皇ではなく、その一代前の醍醐天皇の決裁であり、醍醐天皇を桐壺帝と見做せば源氏殿は父帝から追放されたことに成ってしまう、という整合性の無さだ。いや然し、架空だからこそ本音が言える作り話としては、このくらいの整合性の無さがギリギリ史実に肉薄している、とさえ逆説出来る程の固有名詞の使い方なのかも知れない。だから元々、「前の朱雀院」が誰かを特定することは出来ないことに成っている語りなのだ。にも関わらず、当時の藤原上層部が「朱雀院」に抱く共通認識は、この呼称に反映されているとも推察できる。前に「八条の式部卿」項目でその考察文を参照した藤河家利昭広島女学院大学教授が、このく梅枝の巻の「前の朱雀院」について>という考察文も HARP サーバに公開なさっていて、その7/14 ページで総合巻第一章第一段の「院はいと口惜しく思し召せど、人悪ろければ、御消息など絶えにたるを、その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の管、打乱の管、香壺の管ども、世の常ならず、種々の御薫物ども、薫衣香、またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、心ことに調へさせたまへり。」という朱雀院が前斎宮の今上帝への入内を残念に思った行を指摘して、源氏殿に心情を押し切られる無念さと其れを王家の宿命と受け止める悲しさを朱雀院の薫衣香が象徴するかの示唆をしておられる。つまりは其れが作者の意図する、此処で明石の御方が薫衣香を奉る情景の奥深さ、なのだろう。が、今の朱雀院と明石の御方に接点は無いため、語り手は軽く「前の」と逃げたワケだ。それ以上の意味は、恐らく断定出来ないだろう。いや然し、そうであれば「朱雀院」の引き合いは「薫衣香」の性格付けだけの語用で、この「前の朱雀院」は物語上の朱雀院とも切り離れた文意で語用されていることになる。「公忠朝臣(きんただのあそん)」は、史実で朱雀天皇に仕えた蔵人らしいので、この人が昔に「ことに選び仕うまつれり」した御方こそが在位時の朱雀天皇であり、その朱雀天皇が公忠に「前の朱雀院のをうつさせたまひて(前の朱雀院の薫衣香を模造させ為さつて)」という構文で、その「前の朱雀院」が宇多上皇なのか他の上皇かは特定できない、といった言い方に見えてくる。で、其処でだ、明石御方が「百歩の方(ひやくぶのはう、百歩の外を多く過ぎ匂ふほどの芳香を放つ配合処方?)」を「思ひ得(おもひう、知り得)」ることが如何して可能だったのか、という疑問に藤河家教授は松風巻第一章第二段の「昔、母君の御祖父、中務宮と聞こえけるが領じ給ひける所、大堰川のわたりにありけるを、その御後、はかばかしうあひ継ぐ人もなくて、年ごろ荒れまどふを思ひ出でて、かの時より伝はりて宿守のやうにてある人と呼ば取りて語らふ。」という一文を参照して、御方が母方の中務宮家から「百歩の方」の伝承を受けていた可能性の高さに触れ、姫の入内を控えた今の時点での、御方の権威付けを意図した作者の語り口、を指摘しておられる。ざっと踏まえたい。あっさり流した女房語りだろうに、今さらに手こずる文だが、今時の平民が是を読む為に斯様に手間取るのは、仕方がないか。

「\*心ぎたなき判者なめり(はっきりしない判定者だな)」 \*心汚しは「心清し」の反語だろうからくさっぱりしない、はっきりしない>という悪口だ。

と聞こえたまふ(と殿は申しなさいます)。

#### [第四段 薫物合せ後の饗宴]

\*月さし出でぬれば、大御酒など参りて、昔の御物語などしたまふ。 \*「月の出」について、注にはく十日の月。夕刻やや早めに出る。>とある。ただ、春の月齢十日の月の出は昼過ぎの13:00~14:00、正中は20:00~21:00、没は夜中の2:00~3:00、といった辺りらしく、高く上がったという事なら20:00くらいだろうか。早めに出た、というよりは、早めに雨が上がって、雲が晴れて、月が高く出た時分かも知れない。「大御酒(おほみき)」の「大」は<祝意の接頭語>で、「大御酒参る」は<大量の酒を飲む>ではなく<目出度い酒を飲む=酒宴を開く>とのこと。

霞める月の影心にくきを、雨の名残の風すこし吹きて、花の香なつかしきに、\*御殿のあたり言ひ知らず匂ひ満ちて、人の御心地いと艶あり。 \*「御殿のあたり」は「おとどのあたり」と読みがある。是が、六条院の敷地一帯なのか、春の町の部屋中なのかだが、「花の香なつかしき」が<南庭の梅の木が品良く香っている>のだとしたら<部屋中に>その「匂ひ満ちて」、「昔の御物語などしたまふ」「人の御心地(ひとのみこち、殿と宮の御気分は)」「いと艶あり(すっかり興に浸っていました)」、と読んで置きたい。

\*蔵人所の方にも(蔵人所の従者控え室でも)、\*明日の御遊びのうちならしに(明日の後宴で行なわれる演奏会の打ち鳴らしに)、御琴どもの\*装束などして(楽器類の点検などをして)、殿上人などあまた参りて(昇殿できる役人が大勢参じて)、をかしき笛の音ども聞こゆ(風情ある笛の音などが聞こえます)。 \*「くらうどどころのかた」は注に<六条院の蔵人所。撰関家にも置かれた。>とある。「撰関家にも置かれた」というのは、撰関家でも蔵人が公費負担で養われた、ということだろうか。「蔵人」は字から見て元々は私的な倉庫番ないし倉庫管理者の呼称だったのではないだろうか。それが、何らかの経緯で天皇家の私的な倉庫管理者を公的な事務処理に当たらせることになり、それが恒常化して公職となった。としたら、実務は侍所と同じ側用人で、高官家に何人扶持と定額支給されていた職員手当を、撰関家には朝廷が直接に公務員として丸抱えした、のかも知れない。 \*「あすのおんあそび」は明日の裳着が無事終了して、夜が明けた明後日の後宴、なのだろう。 \*「しゃうぞく」は<正装すること、その衣類>の他に<家屋・道具などを飾りつけたり整えて支度したりすること。しつらえ。また、その装飾品。>と大辞泉にあり、楽器であれば点検・掃除・調律などか。

内の大殿の頭中将、弁少将なども、\*見参ばかりにてまかづるを、とどめさせたまひて、御琴ども召す。 \*「見参」は「げんざん」の読みで<目下の者が目上の人に会うこと>または<目上の人が目下の者に在ってやること>とある。「見参ばかり」とは<挨拶だけ>ということらしい。裳着を明日に控えた殿に、後宴の準備も万全です、と報告をして「まかづる(下がる)」のは、ごく良識的な行動で、それを引き止めて演ずる為に楽器を用意させるのは、殿と宮の相当な上機嫌ぶりだ。

宮の御前に琵琶、大臣に箏の御琴参りて、頭中将、和琴賜はりて、はなやかに掻きたてたるほど、いとおもしろく聞こゆ。宰相中将、横笛吹きたまふ。折にあひたる調子(春らしい明るい曲を)、雲居とほるばかり吹きたてたり(雲に届くほど高く吹き鳴らしました)。

弁少将、拍子取りて、「\*梅が枝」出だしたるほど、いとをかし。\*童にて、韻塞ぎの折、「高砂」謡ひし君なり。 \*「梅が枝」は注に<催馬楽「梅が枝」呂。「梅が枝に 来居る鶯 や 春かけて はれ 春かけて 鳴けどもいまだ や 雪は降りつつ あはれ そこよしや 雪は降りつつ」>とある。「春かけて」は<季



節が春に成り掛けて>だろうか。「かく(掛く)」は<少し届いた>でもあり<遂に届いた>でもありそうだ。春待ち鳥に名残雪の早春賦か。何か下話があるのか。子細不明。 \*「韻塞ぎの折、高砂謡ひし君」は注に<「賢木」巻(第六章三段)に見える。>とある。その場面は可愛らしく、私もその童の印象を持ち続けている。賢木巻第六章第三段には「中将の御子の、今年初めて殿上する、八つ、九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするを、うつくしびもてあそびたまふ。四の君腹の二郎なりけり。世の人の思へる寄せ重くて、おぼえことにかしづけり。心ばへもかどかどしう、容貌もをかしくて、御遊びのすこし乱れゆくほどに、「高砂」を出だして謡ふ、いとうつくし。大将の君、御衣脱ぎてかづけたまふ。」とあった。是は今からは十四年前の、その二年前十一月に桐壺院が崩御し、その喪明けの翌年十二月に藤壺中宮が出家し、その年の年始人事で右大臣家による左大臣家への冷遇が始まったという須磨流浪前年の源氏殿 25 歳の夏のことだった。

宮も大臣も\*さしいらへしたまひて(宮も大臣も合いの手を唱和なさって)、ことごとしからぬものから(寛いだものだったから)、をかしき夜の御遊びなり(楽しい夜の合奏でした)。 \*「さしいらへ」は<受け答え>と大辞泉にある。が、「差し」という接頭語は「差し挟む」「差し入る」などの<分け入る>語感で、「受け答え」というよりは<合い槌を打つ>、歌なら正に<合いの手を入れる>ということだろう。「梅が枝」なら「や」「はれ」などの囃子言葉を唱和したに違いない。ただ、「差し応ふ」という動詞は無さそうだ。

御土器参るに(おんかはらけまゐるに、殿が御酒を勧め申せば)、宮、

「鶯の声にやいとどあくがれむ、心しめつる花のあたりに (和歌 32-03)

「鶯の歌も楽しい春の庭 (意識 32-03)

\*注に<蛩宮の和歌。「鶯」は催馬楽「梅が枝」の語句を受け、「しめつる」は薫物の縁で用いたもの。>とある。「あくがる」は「吾離る」で<我を忘れる←魅了される>。だから、もっと場に即して意を汲めば<弁の歌でますます興じる、この梅の香が心に染みる御殿の庭先で>という素直な感想を和歌の語数で言ったもの、なのだろう。

\*千代も経ぬべし(先年でも居たいね) \*注に<「いつまでか野辺に心のあくがれむ花し散らずは千代も経ぬべし」(古今集春下、九六、素性法師)>と参照指摘がある。確かに踏まえていそうだ。

と聞こえたまへば、

「色も香もうつるばかりにこの春は、花咲く宿をかれずもあらなむ」(和歌 32-04)

「花の香おりが移るほど、通い続けて下さいな」(意識 32-04)

\*注に<源氏の唱和歌。「なむ」終助詞、他者に対するあつらえの気持ちを表す。>とある。「うつる」は「移る(伝える)」と「写る(染まる)」で、薫物合せに於ける香の調合法の伝承と芳香自体の豊かさを讃えた言い方。「かる」に「枯る(花が枯れる)」と「離る(行き来が途絶える)」を掛けている。凝った言い回しで、即興で詠んだとしたら大変な技巧だが、歌筋は「どうぞごゆっくり」という在り来たりの接客挨拶なので、素人の率直さに霞むプロの技、みたいな印象。

(と殿は唱和して)頭中将に賜へば(杯を頭中将に授けると)、取りて(中将は受けて次のように詠んでから)、宰相中将にさす(源中将に回します)。

「鶯のねぐらの枝もなびくまで、なほ吹きとほせ夜半の笛竹」(和歌 32-05)

「いっそねぐらの鶯に、春を知らせる笛の声」(意識 32-05)

\*注に<柏木の唱和歌。夕霧の横笛を誉める。>とある。ウグイスは「春告げ鳥」だが、さすがに寝ている時は鳴かない。「通す」は<力を及ぼす>。「夜半(よは)」は<夜、夜中>だが、「半」は<分ける→知らせる>の語感。

宰相中将、

「心ありて風の避くめる花の木に、とりあへぬまで吹きや寄るべき」(和歌 32-06)

「風も気遣う花の木を、とり間違えて吹き飛ばす」(意識 32-06)

\*注に<夕霧の唱和歌。「取りあへぬ」の音に「鳥」(鶯)を響かす。「吹き」に風が吹くと笛を吹くの意を掛ける。「や」(係助詞)「べき」(推量の助動詞)反語表現。>とある。「避くめる」は<避けるだろう>だろうが、近くて遠い古語の感じ。「とりあふ」は「取り敢ふ(耐える、持ち堪える)」や「取り合ふ(間に合う、適合する、適う)」など。

情けなく(なんてね)」

と、皆うち笑ひたまふ。弁少将、

「霞だに月と花とを隔てずは、ねぐらの鳥もほころびなまし」(和歌 32-07)

「これで月さえ霞まねば、鳥も朝かと鳴き出すに」(意識 32-07)

\*注に<弁少将の唱和歌。「ほころぶ」は「花」の縁語。>とある。で、その「ほころぶ」だが、訳文には<鳴き出す>とある。花の「ほころび」は<つぼみが開いて花が咲く>。糸の「ほころび」は<縫い目が破けて穴が開く>。「ほころぶ」は中身が膨らんで表面の形状が変わる、という語感だ。だから、相好を崩して<笑う>という意味にもなれば、静かだった鳥の巣が賑やかに<囀る>という意味にもなるのかも知れない。語調の類似を狙えば<よろこぶ>もありそうだ。「なまし」は「隔てずは」の反実仮想を受けて<なるだろう>という言い方。兄中将の「ねぐらの鳥」の話題を受けつつ、回し詠みのオチを付けて場面転換を図る歌。

まことに(と詠んだ弁の歌の通りに)、明け方になりてぞ(夜明けで空が明るくなってから座が綻んで)、宮帰りたまふ(兵部卿宮はお帰りになります)。御贈り物に(薫物判者の御礼の品として殿は)、みづからの御料の御直衣の御よそひ一領(御自分用に誂えてあった略礼装一式の一揃いに)、手触れたまはぬ薫物二壺添へて(未開封の練り香の二壺を添えて)、御車にたてまつらせたまふ(用人をして宮の御車に運び込ませなさいます)。

宮、

「花の香をえならぬ袖にうつしもて、ことあやまりと妹やとがめむ」(和歌 32-08)

「こんな匂いで帰ったら、浮気をしたと妻が言う」(意識 32-08)

\*注に＜蛭宮のお礼の歌。「花の香」は梅花香をさす。「妹(いも)」は妻をいう。＞とある。

とあれば、「\*いと屈したりや(ずいぶん僻みっぽい言い方だな)」と笑ひたまふ(と殿は笑いなさる)。\*「いと屈したりや」は注に＜源氏の詞。『集成』は「(奥方を怖れて) ひどく気弱ですね」の意に解す。『新大系』は「大変な恐妻家ですね。ただし兵部卿宮には現在、北の方はいない」と注す。＞とある。が、「屈す」は＜卑屈になる、偏屈になる、いじける、ひがむ＞と古語辞典にあるが、服従する意味での＜屈する、屈服する＞は説明が無いので、「いと屈したりや」は＜ひどく気弱ですね＞ではなく＜ひどく偏屈になったもんだな＞という言い方かと思う。また、兵部卿宮の家庭事情については余り語られていないが、胡蝶巻第二章第五段で殿が対の姫に「宮は、独りものしたまふやうなれど、人柄いといたうあだめいて、通ひたまふ所あまた聞こえ、召人とか、憎げなる名のりする人もなむ、数あまた聞こゆる。」と説明する場面があって、遊び人で気は多いようだが、それだけに腰が落ち着かないのか、どうやら「北の方はいない」らしい。その宮が「妹やとがめむ」などと夫婦の機微が分かったような、妙に格好を付けた気取り屋の挨拶をしたもんだから、殿は「いと屈したりや」と一先ず皮肉ったが、それだけでは収まりが付かなかっらしい。それが下文に続く。

\*御車かくるほどに(そして更に、門外で御車を牛に繋がせている宮の所まで)、追ひて(用人に追いかけて)、\*「みくるまかくるほど」は注に＜お車の轆(ながえ、長柄・取っ手)を牛に付ける時に、の意。＞とある。「かくる」は「掛く(つなぐ)」の力行下二段活用の連体形。

「めづらしと故里人も待ちぞ見む、花の錦を着て帰る君 (和歌 32-09)

「分かって貰えないのなら、とんだ宝の持ち腐れ (意識 32-09-1)

「きっと分かって貰えるさ、どっさり積んだ土産なら (意識 32-09-2)

\*注に＜源氏の返歌。「故里人」は家にいる妻をさす。『完訳』は「宮邸にいる人の意」と解す。「錦を着て帰る」は『史記』項羽本紀の「富貴にして故郷に帰らざるは、繡を着て夜行くが如し」による。＞とある。項羽の故事はWeb 検索すると「衣繡夜行(いしゅうやこう)」という四字熟語として有名なものとあり、出世をしても喜んでくれる人が居ないと甲斐が無い、みたいな意味らしい。「四字熟語データベース」サイトには、この対義語として「衣錦還郷(いきんかんきょう、故郷に錦を飾る)」が示されていた。農耕社会の属地性から離れて、共同体意識の希薄な都会暮らしをする者には、「還郷」は狭量に過ぎなく見えても、共同体意識の中で生きる者にとっては決定的な価値観かも知れない。そういう蔑視と羨望の共存は私にも有るし、多くの人に有りそうだ。

\*またなきことと思さるらむ(同じ勘違いなら、この土産物で君が二度と浮気などしないと細君は御思いになるだろうさ、君に奥さんが居たならね) \*注に＜源氏の歌に添えた詞。『集成』は「夫人のない兵部卿の宮を、めったに外泊しない恐妻家に見立ててからかう」と注す。＞とある。「またなきこと」は漠然と＜滅多に無いこと＞というよりは、宮の言う「ことあやまり」を受けたものと解したい。「思さる」の主語は架空の「妹」である「故里人」。

とあれば(とダメ押しがあれば)、いといたうからがりたまふ(宮は実に何とも苦々しく為さいます)。次々の君達にも(以下の頭中将、弁少将の君たちにも)、ことことしからぬさまに(装着の一般来客用ながら)、細長(ほそなが、女物の掛け飾り着)、小桂(こうちき、女物の通常上着)などかづけたまふ(などを祝儀品として与えなさいます)。